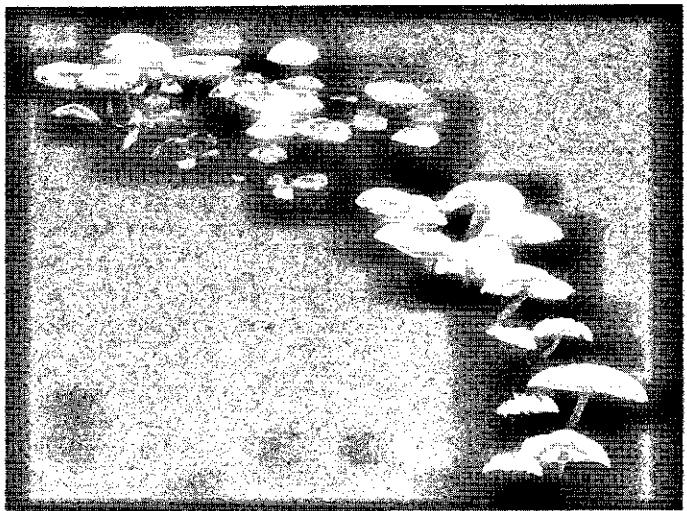


八丈島の光るきのこ ナイトツアー

吹春（北川）公子



暑い夏のビアガーデンに欠かせない植物といえば、南国ムードたっぷりのヤシの類である。その1品種であるフェニックス・ロベレニー（通称：ロベ）の幹に、光るきのこヤコウタケが生えていることがあると新聞に掲載されて早十数年。今年こそはみられるかもしれない、夏になるとレジタル植物の幹に目をやること十数年。なかなかその現場に行き会ったことはないが、今回、八丈島に、7月29日から31日までの3日間行けることになった。八丈島は東京から南に約300km、北緯33° 東経140°に位置し、その温暖な気候を利用して、観葉植物などの花卉栽培を島の主な産業としている。ここへ行けば、光るきのこが島のどこかに生きている！聞くところによると、町役場主催のナイトツアーも行っているらしい。

八丈島へは航路もあるが、今回は羽田から空路を利用。離陸して、水平飛行になったと思ったらすぐに着陸と、所要時間あつという間の30分。飛行機の扉をくぐると、もわあっとした空氣と潮の香り。団体行動を乱さないようにしながら、なにか手掛けたりはないものかと、自だけきよろきよろする。しかし、車窓から見える風景には、まだ光るきのこの手掛けたりはない。もっと入念に下調べをしておけばよかったのだが、しかし、旅はまだ始まつばかり、きっと何か見つかるだろう。

海に面した宿に到着すると、2枚のポスターが目に飛びこんできた。思わずふらふらと吸い寄せられる。1枚には4種類の光るきのこ、ヤコウタケ・シイノトモシビタケ・エナシラッシュタケ・ギンガタケ（仮称）の写真が載っていた。下にはマジックで料金等の書き込みがある。なんとそれは光るきのこツアーやのまったくそれらしくない勧誘ポスターだった。もう1枚はいかにも光るきのこナイトツアーというのがわかり、さらにホタルの乱舞も見学に入れたものだった。しかし、こちらはヤコウタケ1種しか載っていない。うーむ。さっそくフロントに問い合わせると、「大体どちらも同じです。タクシー1台¥3,000で、5名までの予約制です。暗くなる19時ごろから始まりますが、お客様の時間指定はできません。」どうやら予約順に走行するようだ。しかも、タクシーの空いている時間を使っていることで、本業も平行するらしい。限られた時間と資源を有効に利用しているのに思入った。こちらも予定は詰まっている。しかし、何がなんでも行ってみたい。

翌朝、予定がなんとかなりそうだったので、同行者のなかで参加者を募り、3名とともに参加申し込みをした。二者択一の結果、前者の4種類の光るきのこを選んだ。「それでは、19:30にロビーにいてください。」これで、まちに待った光るきのこにあえる！

夕食を早々に切り上げ、迎えに来たタクシーに乗りこむ。「今日は確実に2種類は見られると思いますよ。最初にホタルを見に行きますね。」街の中をぐるぐるまわって、

かなりはづれに来た様子。真っ暗な細い水路に着くと、「ここから水路に沿って歩いてください。この先で待っています。」懐中電灯が貸し出され、タクシーは闇のかなたに消えていった。懐中電灯を消し、闇に日が慣れてくると、水路にはホタルがちかちかしている。光の強いゲンジボタル。八丈島にもホタルっていたんだ…？？もばし見とれる。後で聞くと、島にもとかいろいろことはいるが、現在はかなりの数を放流しているようだ。その数なんと20,000匹。しかし、ホタルはいいが、肝心の光るきのこはどこで出会えるのだろう。ここで光を放っているのはすべて点滅している。

と、歩く先に人影が。タクシーの運転手さんである。「右手のロペの烟の巾をよく見てください。」水路の切れるあたりから寒冷紗のような網のかかった烟が続いている。じーっと日を凝らすと、幹の中ほどにボサーッと綴りく光るもののが。あっ！点滅していない。正真正証明のヤコウタケ。あたりまえのことながらもっと近くで見たいので、烟の中へ入れないのか聞いてみると、「ここは中に入れないんです。光るきのこが生えているのはだいたい煙なんで、持ち主さんの許可がいるんです。次の場所で見ることができますから。」と、なだめられてタクシーへ乗り込み、次の地点へ。

着いたところは道路脇のビロウ烟。烟というより林に近い。車を降りてすぐにウッと思う。私事であるが、どうもこの地球草創を彷彿とさせるような姿は昼間ですら怖い。太い円柱のような胴が大きさを揃えて林立しているのはさらに苦手なのである。しかし、この中にめざすきのこがあるのなら、たとえ火の中水の中…いや、ビロウの中…。「ところどころに木を抜いた大穴があいていますので、落ちないように気をつけてください。」背中をゾクゾクさせ、懐中電灯で照らされた、大きな团扇のような葉を踏みながら、ちょっとしょとりした林を穴をよけながらゆっくり歩いていく。50歩くらい歩いたところで、「この辺にヤコウタケが生えています。懐中電灯を消してください。」日が慣れると、先ほどみた光が飛び込んできた。そう多くはないが、木の幹（幹というより葉柄根）や葉柄にちらりほらり見える。ちょっとだけ怖さが薄らいでゆく。頭上では茂った葉の隙間から月明かりがもれる。と、またちがう青白い光が目に入ってきた。「こちらはエナシラッシュタケです。」茶色く枯れて垂れ下がったたり、落とされたりした葉の脈に沿うように点々と見える。大きくて1cmに満たない。思ったよりもかなり小さい。つい、採集しようとする、「きのこは後の入たちのためにとらないでください。」なるほど、これは商売道具なのであった。失礼失礼。

道筋にわりと近いところだったので、もう少し奥へ行ってみたいとせがむと、「この奥にはもうきのこはえていません。」「????」「スプリンクラーで漏らせてある所だ



八丈島のサトイモ烟(左側に植えているのがフェニックス・ロベレー)

けです。」なるほど、林床がぬれているわけがよくわかった。観光の目玉とするためには、きのこが生えることのできる環境と湿度を保ち、そこに行けば必ず見られるようになくてはならない。木が日照りで乾燥するのを防ぐのも当然のことだが、きのこが生えやすい環境をつくりだすために、スプリンクラーは必需品なのである。そして、その湿度を保つために寒冷紗のような網が必要なのだ。はじめは、きのこツアーや聞いて、どんな山の中にいくのかと思っていたが、なんとこれによって、街の中で手軽にきのこが観察できるというわけなのだ。

「次のみなさんが待っているので、交代しましょう。」ともときた道をまた穴をよけながら林の外に出る。懐中電灯を回収され、「ご堪能いただけましたでしょうか。それでは戻ります！」えっ？ポスターにあったのは4種類。最初にそうは聞いていたが、まだ2種類しか見ていないではないか。とっさに問うと、残る2種類は山林の中にでるため、案内をすることはできるが要予約で、料金はタクシー賃料金とのこと。一般的でないのでツアーメニューではないようだ。加えて、いずれも時期は梅雨で、今期はまだ残ってはいるものの、あらかじめ終わってしまい、とくに晴天が続くと見ることが難しいという。シイノトモシビタケやギンガタケ（仮称）なんていう調査中のきのこも見たかったのに。ちょっとがっかり。またもやなだめられて、車は宿に直行便。

所要時間は約1時間半。電気のこうこうとついた宿に戻ると、なんだかキツネにつままれたような感じだ。今までなにか別世界へ行っていたような感じさえする。不思議な気持ちが残るなか、電気を消した真っ暗な部屋で、観察のためにともらってきた、落ちたビロウの花枝についたエナシラッシュタケの放つ怪しい光を見ながら余韻にひたつた。次回はぜひ時期をあわせて来てみよう。

●八丈町役場のホームページ <http://www.town.hachijo.tokyo.jp>